

2006
気候・植生

〔IV〕 表中の(a)～(o)に入れるのに最も適当な語句を表の下の語群から選び、その記号をマークしなさい。

世界の気候はケッペンによれば樹木気候と無樹木気候に大きく区分できる。樹木気候地域は樹木の生存に十分な熱と水に恵まれているところで、無樹木気候はそうした熱か水、または両者を欠く地域である。次の表は気候帯を特徴づける植生についてまとめたものであるが、あえて緯度順の配列を崩している。

気候区分	樹林・草原など	構成する樹種など	分布地域
樹木気候	(a)	カシ・クス	(b)
樹木気候	(c)	種の多様性大	(d)
樹木気候	(e)	エゾマツ・モミ	シベリア
樹木気候	サバナ	(f)	(g)
樹木気候	(h)	(i)	スペイン南部
無樹木気候	(j)	^{おび} 丈の低い草原	(k)
無樹木気候	ツンドラ	(l)	(m)
樹木気候	(n)	ブナ・ケヤキ	(o)

〔語 群〕

- | | | |
|------------------------------|----------|------------------------------|
| (ア) ステップ | (イ) 照葉樹林 | (ウ) 南米のリャノ |
| (エ) ボツワナ | (オ) 硬葉樹林 | (カ) カリマンタン島 |
| (キ) 地衣類・ ^{せんたひ} 蘚苔類 | (ク) 熱帯雨林 | (ケ) コルクガシ・ ^{けい} 月桂樹 |
| (コ) 西ヨーロッパ | (ク) 針葉樹林 | (シ) グリーンランド沿岸部 |
| (ス) 落葉広葉樹林 | (セ) 九州南部 | (ソ) 疎林を交えた丈の高い草原 |
- (以 上)

2010 3/4 気候と植生

〔 I 〕 次の植生に関する各問について、該当するものを一つ選び、その記号をマークしなさい。

問(A) 地球規模の植生分布を見る上で、最も重要と考えられるものは次のいずれか。

- (ア) 気候 (イ) 地形 (ウ) 土壌

問(B) 温帯の常緑広葉樹林のうち、夏季の乾燥に耐えうる樹林は次のいずれか。

- (ア) 雨緑林 (イ) 硬葉樹林 (ウ) 照葉樹林

問(C) 問(B)の樹林は永く開発を経験してきた地中海沿岸よりも、破壊されたとはいえ比較的広くオーストラリアに現存している。オーストラリアに最も特徴的な樹種の一つは次のいずれか。

- (ア) オリーブ (イ) ユーカリ (ウ) コルクガシ

問(D) 中国南部や西日本の温帯モンスーン気候などに展開する常緑広葉樹林は次のいずれか。

- (ア) 雨緑林 (イ) 硬葉樹林 (ウ) 照葉樹林

問(E) 問(D)の樹林に関わって、西南日本の文化を中国雲南省などの文化と結びつける考え方がある。とくに次の樹木については、暖地の植物とされる樹木が東北地方北部にも分布し、人が運んだという伝承が残っていることから、民俗学者柳田国男は、自然植生ではないと考えた。この樹木は次のいずれか。

- (ア) ツバキ (イ) クス (ウ) アカシア

問(F) 落葉広葉樹林には、乾燥に対して葉を落とす場合と低温によって葉を落とす場合がある。前者は熱帯から亜熱帯の乾季雨季のはっきりした地域に見られるがその樹林は次のいずれか。

- (ア) 雨緑林 (イ) 硬葉樹林 (ウ) 照葉樹林

問(G) 問(F)の後者の場合に当たる夏緑林の日本での具体例は次のいずれか。

- (ア) 屋久島 (イ) 白神山地 (ウ) 宮崎県綾町

問(H) カリブ海地域などの熱帯林から産出する樹木のうち、高級家具材として珍重されてきたものは次のいずれか。

問(I) 伝統的な和紙の原料として不適切なものは次のいずれか。

- (ア) コウゾ (イ) ミツマタ (ウ) アカマツ

問(J) 最も二酸化炭素を吸収していると考えられているのは次のいずれか。

- (ア) 熱帯雨林 (イ) 温帯常緑樹林 (ウ) 亜寒帯林

2007年世界の林業

〔I〕世界の林業(2003年)に関する次の文と図1～図3から、A～Jに該当する国名(ただし、中国は台湾、香港、マカオを含む)を下記の語群から選び、その記号をマークしなさい。なお、ここで述べる数値は世界国勢図会によっている。

世界の木材伐採量の上位8カ国、輸出量・輸入量のそれぞれ上位8カ国を抽出した。その結果、国に重なりがあるので計17カ国が得られた。このうち、10カ国をA～Jの記号で表現している。

図1～図3に見える国の上から下への配列は同じで、伐採量の多いものをより上に配置している。図1では、用材と薪炭材の伐採量をあわせて示している。図2は図1の伐採量のうちの針葉樹率である。図3の横軸目盛は図1のそれに比べて、3倍ほど誇張しているので注意が必要である。

2003年の世界の木材生産量は、33億4千万 m^3 で、このうちの2億4千万 m^3 、つまり7%が輸出入されている。図1の薪炭材とは燃料用のものであり、そのほとんどが自給用である。他方、製材や合板などの工業生産に使用される用材は、輸出入の対象となる。

用材伐採量最大のAは、輸入量でも最大値を示す。インドは世界第2位の伐採量を示すが、そのほとんどが薪炭材である。針葉樹の割合は3.7%と低い。伐採量第3位を占めるB、第4位を占めるCはいずれも高い薪炭材比率を占めるので、発展途上国と考えられる。なお、Bの木材輸入量は近年急激に拡大し、1999年にはIを抜き、Aに続いて第2位を占めた。Cには赤道が通るが、針葉樹率は22%と高い。これは、Cの南緯部には温帯気候が広く見られ、パナ松などの針葉樹が分布することと関連がある。

DとEの輸出量は群を抜く。DはAに比べると針葉樹率が高く、これは緯度的位置関係に対応している。さらにDの用材比率はきわめて高く、先進国に属すると考えられる。Eの地域性は多様で、先進国に区分されるのではあるが、薪炭材の比率が相対的に高い。IはEの極東地域から大量の木材を輸入している。90年代にはEからBへの輸出が急増している。

図1 伐採量 (百万 m^3)

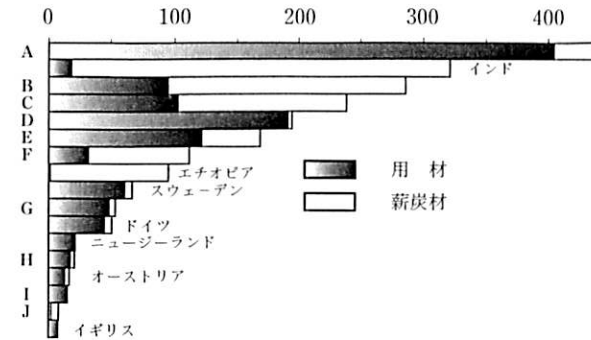


図2 針葉樹率 (%)

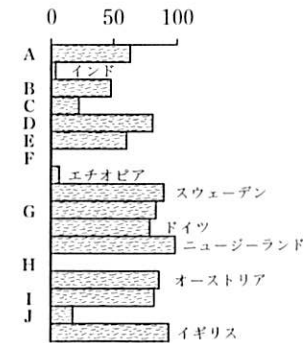
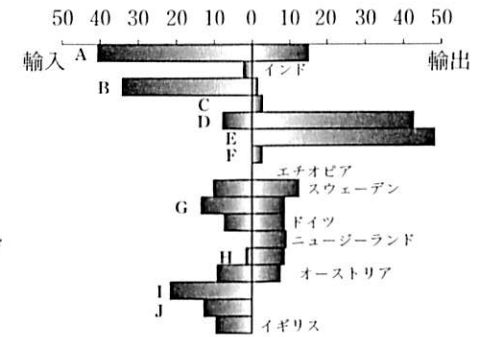


図3 輸出入量 (百万 m^3)



伐採量第8位のエチオピアの薪炭材率はきわめて高く、図3での輸出入量値はゼロになっている。図1～図3に見える17カ国のうち、輸出する途上国は、B、C、F、Hである。針葉樹率からみて、FとHはすべての範囲が熱帯域に位置することがわかる。輸出量にかかわらず、途上国の伐採量に占める薪炭材の比率は高いが、Hは例外で薪炭材比率が15%と低い。これはIへの輸出用材が多いためである。Iは、輸入先を1960年代はフィリピン、1970年代はF、1980年代はHのサラワク州と変え、これら熱帯林を食いつぶす形で木材の輸入